

証券業者による鉱山経営とリスク管理

—八溝金山事件を中心として—

小 川 功

はじめに

株式仲買商ら個人証券業者による鉱山経営としては島徳蔵による持部銅山、但馬金山経営、静藤治郎による北松炭田経営、野村財閥による大東物産、ヤマト鉱業（野村鉱業）など大阪株式取引所関係の事例も知られるが、ここではその前段としてまず明治期の東京株式取引所関係の仲買商等による一連の金山経営の流行を取り上げたい。「当時は仲買人ばかりではなく、財界人として名のある人々の間には、金鉱に投資し、若くは金山を経営しているものが相当にありました。それが当時の財界の流行」（盛衰p260）だったといわれる。

「リスク・テーカー」としての株式仲買人等がもともとリスクの高い日々の商家経営活動の傍ら、さらにハイ・リスク分野（本稿では鉱業）に積極的な投資活動を行い、証券業と並ぶ家業として鉱山経営に少なからず関与した結果、多くは破綻した興味深い事実を、彼らのリスク管理能力¹⁾の面から検討しようとするものである。筆者の企業破綻・金融破綻研究の一環として、近年すすめつつある「虚業家」²⁾検出作業の延長線上に鉱業分野等をも位置付けようとするもので

1) 安田与四郎が著した『株式市場の裏表』では「過去に於ける＜仲買人＞成功者の例を見ると…巧妙に鞘取り商内をして、思惑を避けたもの」（安田与四郎『株式市場の裏表』昭和2年、p194）を挙げている。例えば「電光將軍」小川平助は「抜け目のない稼ぎ人で、東京と大阪両市場の鞘関係を怠らず注意して稼ぎ溜めて居る」（『株式放資と売買術』p253）といわれ、先代の竹原友三郎（大正7年9月死亡）も「手堅いソロバンの持主で…専ら口銭主義、サヤ取り主義の商内に終始」（奥村千太郎「火つけ役に煽られる」『相場今昔物語』日本経済新聞社、昭和27年、p155）したとする。これに対して、「大阪市場成金の一人として稍存在を認められる位置となった」と自負する千原伊之吉は「元来、自分はあるだけの資力全部を投げ出して、乗るか外るかの大勝負をするのが、独特の流儀であったので、自分の此一か鉢かの張り方は、市人の眼を敵たしめた」（千原伊之吉『成金物語』p119）と自認している。

2) 拙稿「『企業家』と『虚業家』の境界—岩下清周のリスク選好度を例として—」『彦ノ

ある。本稿は滋賀大学リスク研究センターの金融リスク等に関する共同研究プロジェクト成果の一部である。関係各位のご支援に謝意を表したい。

I. 半田庸太郎の鉱山経営

半田庸太郎は織田昇次郎、栗生武右衛門⁴⁾と帝国商業銀行（帝商）の大口融資が焦げ付き、整理を余儀なくされた帝商の融資先「御三家」と呼ばれた。元来帝商は「株式仲買人の金融を主とする銀行で…取引所及び仲買人あつての銀行」⁵⁾であつた設立の経緯による。

半田庸太郎は安政3年3月26日麻布の半田喜市の長男に生れ、明治2年ころから平市両替店で同僚の田中平八、今村清之助らと勤務、さらに岩重両替店で修行した後、15年株式仲買として独立、「丸上」印岩井屋を開店、19年2月東

根論叢」第342号、平成15年6月参照。なお「虚業家」という言語の用例については別稿「企業家と虚業家」「企業家研究」第二号、企業家研究フォーラム、平成17年6月参照

- 3) 本稿では明治の年号は原則として省略するとともに、新聞雑誌会社録等は以下の略号で本文中に示した。（新聞）東日…東京日日、読売…読売新聞、萬…『萬朝報』、保銀…『保険銀行時報』、（雑誌）、B…『銀行通信録』、K…『東京経済雑誌』、（会社録）諸…牧野元良編『日本全国諸会社役員録』商業興信所、資…『商工業者資産録』明治34年、商…『日本全国商工人名録』、帝…『帝国銀行会社要録』、要録…『銀行会社要録』、紳…交詢社『日本紳士録』、帝信…帝国興信所『帝国信用録』、日韓…『日韓商工人名録』明治41年、実業興信所、商工…『商工信用録』東京興信所、（頻出資料）沿革…『京浜電気鉄道沿革史』昭和24年、名鑑…『日本鉱業名鑑』鉱山懇話会、大正6年、大正13年、変遷…『本邦銀行変遷史』銀行図書館、平成10年、盛衰…長谷川光太郎『兜町盛衰記』第一巻、日本証券新聞社、昭和32年、年表…日本証券経済研究所編『証券年表』平成元年
- 4) 織田昇次郎は帝国商業銀行の大口融資先の東株仲買人であつた。大正3年の相場急落の際には仲買人代表で解合による建玉を整理した。大戦後に廃業して織田信託を創業した。麻島昭一『本邦信託会社の史的探究』日本経済評論社、2001年、p329 以下参照
山栗印こと栗生武右衛門は、「紀州から出て来て、神田川に米屋の店を出し」（盛衰p345）た。30年4月東株仲買人免許（年表p38）、40年10月京浜社長就任（沿革p168）、「「無軌道」のようにも見えるくらい放胆な人」（盛衰p346）、「株式の方も積極的で、全国至るところに支店網を張りめぐらし、その頃としては乱暴とも見られるくらい万事につけ積極的でした。つまり株と米との双股かけて、無軌道的な拡張方針を実施したので、それが祟って、不況時代には堪えられず、自然と経費まけの態で窮境に陥り」（盛衰p347）、大正3年6月27日東株仲買人を廃業（年表p38）、店を養子の栗生藤三に譲り、奉天取引所を経営、後に満洲取引所に発展した。（盛衰p347）
- 5) 『男爵郷誠之助君伝』郷誠之助記念会、昭和18年、p283

株仲間を買入を開業し、東京商業会議所議員にもなり、20年東株仲間組合委員、32年1月仲間組合委員長となった。⁶⁾さらに東京株式取引所監査役を兼ね（要録M34役p57）、独眼流將軍と呼ばれた。株式仲間半田商店を日本橋区坂本町5に、自宅を芝区二本榎西町3に置いた。⁷⁾半田庸太郎は「意地っ張りで、人を圧する癖」（盛衰p208）のために、豊川鉄道の買占めに対して実勢を無視した高値と考えて売り向った有力仲間人である。

半田庸太郎は39年1月「土地建物賃貸家禽類及卵子販売林業経営」を目的として半田合名会社（資本金50万円、芝区二本榎西町3）を、39年11月「鉱物採掘製錬売買硫酸製造売買」を目的として半田鉱山合資会社（資本金50万円、南茅場町）をそれぞれ設立した。

半田合名の代表社員は半田庸太郎、社員は半田英三（三男）、社員半田喜代（長女）、半田守之助（四男）と一族で占め（日韓,p81）、半田鉱山の代表社員（社長）半田庸太郎出資額25万円、理事半田英三10万円、専務理事松原嶋（元三井鉱山）、半田喜代、半田守之助各5万円（要M40,p154）、社員半田英三、松原嶋、半田俊（日韓,p64）、技師長前田精明、出張所主任金岡吉太郎であった。（諸M42,p175）飯田町と隅田川に出張所を配置した。半田鉱山の所有した鉱山は都留鉱山（事務長 凶師崎助幹）、御所沢鉱山（事務長 秦伝次郎）、豊岡鉱山（事務長 馬場海蔵）、山梨無煙炭砒（事務長 後藤三郎）、福島炭砒（事務長 今泉浅次郎）、茨城炭砒（事務長 三浦兵蔵）等の数鉱山に達した。（諸M42,p175）非鉄金属鉱山から炭砒、硫酸製造まで間口が広いのが特色であるが、主力は金山であった。半田鉱山の看板である宮城鉱山は宮城県本吉郡御岳村に位置する約18.8万坪の金山で、23年小野池徳之助が再興したが、26年休止、33年佐藤徳兵衛、36年菊地儀一郎、37年高橋宗行へと鉱業権が転々としていた。41年には高橋宗行の手で年産4,300匁の金を産出した。42年半田鉱山合資は宮城の

6) 『日本現今人名辞典』明治33年はp65

7) 『実業家人名辞典』明治44年ハ、p10。半田商店からは明治21年福島浪蔵が独立している。半田の持株は京浜⑤1,430株など（要録M40、神奈川,p109）

宮城金山を高橋宗行より取得し開発した。⁸⁾

43年には「直立式気缶及横置式汽機一台『ロールジャックラッシャ』網目八分ノ一吋の円錐篩，斜條篩各一個を増設して更に青化製錬場を開設」⁹⁾するなど，設備投資を実施した。半田鉾山が取得した42年は年産5,472匁，設備増設後の43年は19,985匁，44年18,170匁，45年18,806匁¹⁰⁾，大正4年33,841匁，100,257円，大正5年21,984匁，78,420円，金鉾127トン，2,967円（名鑑T6，p69）であった。また御所沢鉾山は岩手県和賀郡沢内村ほかの40.8万坪で，金銀銅亜鉛を産した。（名鑑T6，p70）

半田庸太郎は40年の所得税862.96円，営業税807.15円を納め（日韓，p191），栗生武右衛門の営業税449.94円，織田昇次郎の営業税410.00円を凌駕していた。一時は半田合名，半田鉾山の両「代表社員として其経営の衝に当り，成績益々挙るを見る」¹¹⁾といわれたものの，40年の下げ相場で損したのが祟ったとされる。「既にその頃から内情は苦しかったようで，しかも鉾山に手を出して，その方がうまく行かなかったところへ，東鉄市有問題に引掛って兜町から退却」（盛衰p345）し，半田商店の丸上印は店員の遠山芳三に譲った。

大正3年6月時点の信用調査では坂本町5，所得税235円，職業欄は「元株式仲買人兼会社員」，正味身代「未詳」，収入「未詳」，信用の程度はDa「少」と，普通以下のランクに下落している。（商工T3，p69）

半田鉾山は大正5年には本店を日本橋区南茅場町に置き，代表社員半田庸太郎45万円，半田俊6.5万円，半田守之助3.5万円に変更していた。（帝，T5p46）大正6年10月時点では佐々浦，都留両炭坑を保有するが，宮城鉾山の鉾業権はすでに株式仲買人の望月軍四郎が社長の望月同族（株）取締役の村上浜吉（坂本¹²⁾

8) 『明治工業史 鉾業編』日本工学会，昭和5年，p124

9) 明治44年11月25日『実業之世界』p308

10) 『明治工業史 鉾業編』日本工学会，昭和5年，p133

11) 『実業家人名辞典』明治44年ハ，p10

12) 望月軍四郎は村上太三郎商店勤務後，株式仲買として独立。京浜会長，日清生命社長，望月同族社長，湘南電気鉄道役員

町34) 外1名に変更されていた。同様に御所沢鉱山も産業銀行取締役の矢島浦太郎(神田区大工町) 外1名に変更されていた。(名鑑T6, p69, 70)

半田合名は45年時点の『地籍台帳』の名寄索引では宅地6,406.44坪, 雑種地15.521坪で, 内訳は日本橋区南茅場町2筆, 京橋区南鍛冶町1筆, 芝区二本榎西町9筆, 品川区歩行新宿19筆であった。¹³⁾大正5年には半田合名は本店を芝区二本榎西町3に, 支店を日本橋区坂本町5に置き, 半田英三が代表社員25万円, 半田庸太郎25万円になっている。

II. 富倉林蔵の鉱山経営

日露戦争の戦時景気で東株, 鐘淵紡績等の買占めで巨万の利益を得た鈴木久五郎(鈴久)は「成金」という言葉の語源になった新興銀行家である。銀行の資金をバックに鐘紡を買占め, 同志を併せて数万株もの大株主となった鈴久は「株界に連戦連勝を博し…終に本邦の株式界は全く氏の一手に依りて左右せらる…実に本邦空前の成金者」¹⁵⁾と持てはやされた。鈴久は紀文そこのけの豪遊・散財を重ね, 露骨な成金ぶりを遺憾なく発揮して連日新聞紙面を賑わせた。この鈴久と組んで39年下期から40年上期にかけて鐘紡で三井銀行に次ぐ1万株超の第2位大株主に躍り出た東株仲買人が当時はまだ珍しい長距離電話を個人で四本も設置し, 海福丸, 第二大安丸, 長山丸3隻計6,897トンを所有する¹⁶⁾富倉林蔵であった。

富倉は細谷仙蔵の次男として元治元年11月22日現在の埼玉県に生れ, 後に郷里を出て「素と雑穀問屋兼仲買商を業」¹⁷⁾とする富倉家の養子となった。神田区

13) 『地籍台帳』明治45年, p21

14) 半田英三(日本橋区坂本町5)は兼務なく(帝要録, T5 職p35), 大正9年には先代から店名を引き継いだ遠山芳三商店に入店, 現物部主任となり, 大正14年3月家督相続(『大衆人事録』昭和3年版, 帝国人事通信社, ハp81), 弟の半田守之助も魚商(神T11, p111)に勤務先を変更した。

15) 『京浜実業家名鑑』明治40年, p750。39年9月~40年2月鈴久に同調した大株主は富倉のほか, 石田友吉, 中島伊平, 豊田喜三, 鈴木善五郎ら。

16) 通信省管船局編『日本船名録』帝国海事協会, 明治43年, p521

17) 『大日本人物誌』大正2年, とp6

元久右衛門町1丁目9番地の雑穀問屋兼仲買商・倉田屋¹⁸⁾で、「神田川の雑穀問屋から兜町に進出」(盛衰p345), 29年12月東株仲買人の免許を得た。31年の所得税25.605円(紳M31,p103), 営業税71円余, 33年では中外倉庫監査役, 東洋護謨(33年8月設立, 資本金20万円)監査役のほか, 「回漕業を営み, 富倉船舶部無限責任社員¹⁹⁾」でもあった。

37年8月には兜町に運送を目的とする資本金3万円の合資会社富倉船舶部を日本橋区兜町に設立し, 無限責任社員に就任した。(諸M42,上p186) 44年ころまでに営業目的を「信託, 金貸, 鉱業, 船舶ヲ以テ運送」(諸M44,上p200)に変更して合資会社富倉商店と改称した。「金山に手を出して」(盛衰p260) 鉱山を少なくとも数箇所経営していたとされる富倉林蔵の鉱業経営の全容は明かではないが, たとえば44年滋賀県永源寺の上流に当る鈴鹿の足原谷(扇子野銅山の裏側)で銅鉱採掘を目的として鉱区を設定したが, その後の採掘状況は不明で「成果も上がらずやがて立ち消えになった²⁰⁾」とされる。また富倉は45年3月青森県下北郡川内町でも鉱業権を取得し探鉱したものの成果がなかった²¹⁾。

富倉は40年時点では所得税657.06円, 営業税は米穀商として780.21円, 米穀仲買業として47.26円, 株式仲買業として…円を納め(日韓,p118, 191), 日本橋区兜町5番地, 「カネト」東株仲買人富倉林蔵商店主のほか, 神田区元久右衛門町1丁目9番地で「外国米大豆粕委託売買カネト富倉林蔵商店」(要録M40, 広告p85)も経営するも, すでに鐘紡株は手放し, 東洋護謨など会社役員の兼務も見当たらない。(要録M40, 役なし)

富倉は「明治三十九年の鐘紡の連合買は…株式思惑者が会社の経営に干渉することによって, 高値に玉を売抜ける機会を作ったものである。併し此場合に於いても, 買方が真に成功したか否かは疑問である…鐘紡の買方鈴木, 富倉は

18) 『日本現今人名辞典』明治33年とp27

19) 『大日本人物誌』大正2年, とp6, 『日本現今人名辞典』明治33年とp27, 『現代人名辞典』大正元年とp23, 要録M33役p78

20) 中島伸男『近江鈴鹿の鉱山の歴史』1995年, p207

21) 和田豊作『東北鉱山風土記』仙台鉱山監督局, 昭和17年, p255

翌年早くも没落してゐる²²⁾」とされ、45年の業界通の評では「鈴久を助けて鐘紡の買締を為し、呉錦堂と対戦したので有名だ。其後の形勢は甚だ悪いやうに伝えられて居るが、今尚ほ鉱山を三四箇所程経営して居り、汽船も三四艘は持つて居るが、借金が尠なからずあるので、財産は五六十万円は有るだらう²³⁾」とされた。長山丸譲渡先の石田庄七、宮城鉱山譲渡先の入丸印・村上太三郎らが資金提供者であつたと思われる。45年時点の『地籍台帳』の名寄索引では本人名義はなく、夫人の「富倉のぶ」（神田区元久右衛門町1丁目9番地）名義の宅地は2筆137.64坪であつた²⁴⁾。

大正3年では神田区元久右衛門町1丁目9番地で、職業欄は「元ト株式仲買人」、正味身代「負債」、収入「未詳」、信用の程度はEa「無」と最低ランクに下落している。（商工T3, p96）富倉のその後の消息は「期米もやれば鉱山にも手を出し、商品の思惑もすれば、船を数隻持つていて、その方でも却々に活躍しておりました。むろん四十年の下げでは儲けましたが、この人も鉱山では手を焼いて、それからそれへと、その方に投じた資本が固定して遂に兜町から姿を消し」（盛衰p345）たと伝えられる。

Ⅲ. 松谷元三郎と八溝金山

1. 松谷元三郎

松谷元三郎は明治9年1月23日堺の米問屋松谷利平の次男に生れたが、生家の没落で11歳で加賀市太郎の株式店に奉公した後、堂島の荒木仲買店に転じ、「大阪に…仲買店を開きしが三日にして瓦解の悲運に会す。爾来或は株式に或は米界に乾坤一擲の快挙を試み…一起一倒波瀾重量たるものあり²⁵⁾」といわれ、「天一の称を以て著は」れた「投機界の奇才」「斯界の偉物²⁶⁾」である。業界の鼻摘み的な松谷が「使ひ手のないのを拾って呉れた²⁷⁾」のが後に義父となる堂島米穀仲

22) 安田与四郎『株式市場の裏表』昭和2年, p114

23) 岡本鶴園『兜街繁昌記』壬子出版社, 明治45年, p186

24) 『地籍台帳』明治45年, p34

25) 26) 『現代人名辞典』大正元年マp55

27) 朝比奈知泉『財界名士失敗談 上巻』明治42年, 毎夕新聞社, p291

買人の後藤義三郎²⁸⁾であった。松谷は「後藤の店を代表して…一生懸命に働いた」²⁹⁾と回顧する。松谷は31年6月21日大株仲間人として開業、32年10月2日廃業した。仲間人廃業後も松谷は現物商として、あるいは親密な仲間を機関仲間として駆使して、東西の株式市場、米穀市場等で広く活躍し、「天一坊」の異名をとった。33年6月頃から謀んだ豊川鉄道株買占め³¹⁾が失敗に終り、35年6月に横山孫一郎社長以下の豊川鉄道全役員が総辞職したあと、37年12月日本橋区蠣殻町1-3(武田忠臣の羽田組と同居所)に「手形及有価証券ノ売買並ニ商品売買」(要録M40, p345)を目的とする松谷合資会社を設立し、資本金1万円は無限責任社員たる松谷自身が2,000円、松谷の長男松谷元三³²⁾が5,000円、「後藤義三郎氏の長女、堂島女学校出身にして生花、茶道、琴曲を能くす」³³⁾る松谷の妻の松谷イト³⁴⁾1,000円、義父の後藤義三郎1,000円、後藤義三1,000円をそれぞれ出資した。³⁵⁾

(要録M40, p345) 松谷の配下の今川繁治郎³⁶⁾などが松谷合資の店員と考えられる。なお松谷合資は「松谷一家の経営」³⁷⁾する大正5年10月「有価証券割賦販売、有価証券売買、附随事業」(要録, T9, p65)を目的として設立された日本証券³⁸⁾の⑤1,000株主となっている。(要録, T9, p65)

28) 後藤義三郎は31年時点では大阪市北区堂島浜通1丁目183, 所得税34,605円(紳, M3 1, p923), 40年時点では日本橋区浜町2-11, 他に兼務なし(要録M40, 役p431), 37年12月設立の有価証券売買の松谷合資出資社員1,000円(要録M40, p345), 43年時点では江戸見崎養魚監査役(諸M43, 上p146)

29) 朝比奈知泉『財界名士失敗談 上巻』明治42年, 毎夕新聞社, p291

30) 『大株五十年史』昭和3年, 付p19

31) 豊川鉄道株買占めは拙著『企業破綻と金融破綻一負の連鎖とリスク増幅のメカニズムー』九州大学出版会, 平成14年, p47~51参照

32) 野依秀市『財界物語傑物伝 下巻』実業の世界社, p419。松谷元三は大正14年時点で蠣殻町1-3, 日本証券専務②3,460株主のみ(要録, T15, p45役下p75)

33) 『現代人名辞典』大正元年マp55

34) 松谷イトは大正14年時点で日本証券④5,426株主(要録, T15, p45)

35) 後藤義三は大正11年時点で日本証券取締役(要録, T11, p51), 東京牛乳監査役(要録, T11, p97), 日本証券, 北日本興業各取締役(要録, T15役下p126)

36) 今川繁治郎は「蠣殻町1-3松谷方, 商店員」(商工T3, p34)で, 朝日銀行監査役(日韓p17), 一字違いの今川繁次郎は米穀仲間人(日韓p194)

37) 野依秀市『財界物語傑物伝 下巻』実業の世界社, p419

38) 日本証券の代表取締役には磯部四郎[日本探炭取締役, 帝国炭砒(東京300万円)創

2. 八溝金山の沿革

八溝金山は古く『続日本後紀』に承和3年八溝山から採取された砂金を遣唐使の資金として献上した八溝嶺神社が八溝黄金神の神号を賜ったと記載されている。八溝山の金山採掘は開発に努めた佐竹氏の時期に最盛期を迎え、久慈川流域には金坑跡の遺構も多く、西金、盛金など、往時を偲ばせる地名も少なくない。八溝金山(株)の創立趣意書にもこうした史実を言葉巧みに採り入れて、「如何に往昔盛大を極め、多額の黄金を産したるか」(M38.12.9K)を強調している。

近世には鉱脈が枯渇し、明治にはいっても同様であったが、38年に山方村船生で新たに金山が発見された。明治末期の主要な金山は①八溝金山(黒沢村、鉱区31万坪)、②大沢金山(上小川村、39年設立、鉱区46万坪)、③薬丸金山(山方村、鉱区49万坪)、④茨城金山(袋田村、39年開坑)、⑤栃原金山(上小川村)、⑥久慈金山などであった。³⁹⁾

黒沢村、上小川村、袋田村、佐原村など久慈川一帯に多数の産金事業が企画され、付近は俄かに金山ブームに湧いた。44年8月ころ八溝山の登山口に当る下野宮村を訪れた徒歩旅行団の紀行文によれば、「此の辺一帯…処々に金山多し、斯く産物に豊富なる故か農民の遊惰驚く可く、各戸大の男が午睡の夢をむさぼらざるはなし」⁴⁰⁾と、他村と隔絶した民情に憤慨している。おそらく下野宮村の農民も金山稼ぎに出掛けた上小川村塩沢地区と同様に、金山採掘に狂奔した結果でもあろうか。

3. 八溝金山(株)の設立

八溝金山は38年6月資本金50万円、1万株で茨城県久慈郡黒沢村大字上野宮

▽ 立委員長(T9.9.8 東日 募集広告)、名古屋証券相談役(要録T11, 役上p32)、取締役には神崎三郎兵衛[北日本興業、東京牛乳各取締役ほか(要録T11, 役上p226)]らが就任したが、昭和2年解散した。(『大衆人事録』昭和3年版、マp39)松谷元三らが取締役の北日本興業は大正7年5月「養狐、漁業、獣猟、缶詰、拓殖事業、海陸物産売買、資金供給並仲介」(要録T9, p259)を目的として資本金100万円で設立され、指田伝助、今井秀吉ら日本証券との共通役員が多数存在した。

39) 『大子町史 通史編下巻』平成5年、p206～、斎藤典生「地域産業の変遷—大子町域における産金事業の盛衰をめぐって—」『大子町史研究』第13号、昭和60年3月、p28～33、『角川日本地名大辞典 8 茨城県』昭和58年、p958

40) 吉岡信敬「八溝山頂の野宿」(M44.8.18読売)

に「八溝山系ノ金銀鉱山ノ採掘権ヲ得テ之レヲ採取スル事業」（要録M40,茨城, p28）を目的とする準株式会社として設立された。同社の『創立趣意書』は「今や八溝山は、今上聖明の御代に際し、外には皇軍満洲に戦ひ、内には皇民財用を勉むるの時、恰も再び花咲く春に向へり。吾等同人会社を組織し、以て斯業に従ひ、聊か報国の誠を尽さんと欲す」（M38.12.9K）と揚言した。創立時の社長は「雨宮傘下の枢要人物」（沿革, p180）といわれた三浦泰輔⁴¹⁾、専務「雨宮一派の逸材」（沿革, p176）岩田作兵衛⁴²⁾、取締役義父の後藤義三郎、監査役小栗富次郎⁴³⁾、菅原恒覧（請負業、川越鉄道監査役）であった。その後取締役に守屋此助⁴⁴⁾、監査役に三間隆次（京橋区銀座3-17）が加わった。（要録M40, 茨城, p28, 日韓, 茨城p36）

IV. 八溝金山事件

1. 八溝金山株の上場と株価操縦

創立後2年経過しないと上場できない規定にもかかわらず、「例の天一坊松谷が謀反の本尊となって…米穀取引所と株式取引所の重役中にも仲間があるといふ噂」（M38.11.26東日）で、8月中旬に「方々に手を回して上場株にし」⁴⁵⁾、38年9月1日1万株が売買開始された。⁴⁶⁾1万株中「七千五百株は重役の持ちで、二千五百株だけが浮動株」（M38.11.26東日）であった。当時の上場手続きは仲買人組合委員会に諮問して意見を聞き、東株の重役会議を経て、主務大臣の認可を得ることになっていた。塩島仁吉は「世人多くは取引所を非難して曰く、海のものと山のものとも分らざる不慥なる株式を定期取引に掛けたるは、第

41) 三浦泰輔は甲武鉄道社長、青梅鉄道、小倉鉄道各専務、川越鉄道取締役

42) 岩田作兵衛は呉服太物商・古着商、甲武鉄道検査役、小倉鉄道各取締役、33年3月京浜取締役、36年12月専務就任（沿革p166）、釧路炭砒各相談役（日韓p53）

43) 小栗富次郎（名古屋市大船町40）は大地主、清酒醸造、尾三農工銀行、小栗銀行、小栗貯蓄銀行各頭取、鉄道車輛製造所監査役、知多紡績、名古屋紡績各社長、井口商会各取締役

44) 守屋此助（京橋区南佐柄木町5）は33年3月京浜取締役就任（沿革p166）

45) 由利亀一談『相場今昔物語』日本経済新聞社、昭和27年、p24

46) 東京株式取引所『五十年史』昭和3年、p217

一着の失計にして、更に此の不確実なる株式を売買証拠金の代用物件に加へたるは失計の甚しきもの」(M38.12.9 K)と評している。

金銀鉱山の世界では一般に「事実無いものを在る様に見せかけ、積極的に巧妙に山を飾り立てる悪辣振りには屢々驚嘆させられる」⁴⁷⁾ほどの詐欺行為が行われると言われる。八溝金山では証券界の推奨行為が付加され、「名もない某経済雑誌」の「付録として、その新鉱脈のことがデカデカに報道され」(盛衰p263)だが、これも松谷が「大きな金鉱を見付けた」⁴⁸⁾との風説を流布する詐欺行為が行われたのであった。「名もない某経済雑誌」名を明らかにできないが、「天一坊をはじめ、その頃の兜町の大手…猛者連が何時も顔をあつめて」(盛衰p347)いた栗生武右衛門の仲買店には「山栗の店に籍をおき、傍ら経済新聞を出し…兜町としての業界紙発行者としては、まずその元祖」(盛衰p347)と称された小泉策太郎(その後代議士として政界で活躍)も松谷や武田忠臣らとおなじ「石垣島」の一派であった。こうした機関仲買店の息のかかった「経済新聞」などに提灯記事を書かせることは容易なことと考えられる。

北村熊吉と兜町四丁目の株式仲買人の中島豊次郎(日韓, p191)の「二軒は買方の中軸的勢力を形成していた」(盛衰p270)という。一方、売方は「入丸, 金丸, 山大, 金エなどが売向って居った」(M38.11.26東日)という。八溝金山株の買い手として登場したのは、青物町の立五印福島浪蔵商店の隣りで松谷の同業者たる公債株式現物問屋(後に東株仲買人に昇格)を開業し、「進んでく松谷の>ワキ役を買って出た」(盛衰p264)細野伝次郎であった。「奇策縦横, 神出鬼没…商機を見るに敏」⁴⁹⁾と評された細野は留守を百も承知で安田邸にりっぱな車で乗り付け、家人に頼み込んで自慢の庭を拝見して時間を稼ぎ、さも安田本人と長時間密談した風を装って、車夫の口を通じて「安田買い」の噂を意

47) 菅原公平著『鉱山調査と評価法』丸善, 昭和13年, p167。奥村千太郎(元相場記者)も「現物出資で、二束三文の荒蕪地や鉱山…を高価に見積って売抜けるなどは虚業家の常套手段」(奥村千太郎『株式放資と売買術』文雅堂, 昭和6年, p509)とする。

48) 由利亀一談『相場今昔物語』日本経済新聞社, 昭和27年, p24

49) 『大日本重役大観』大正7年, p11

図的に流布したといわれる。三浦が社長、岩田が取締役の金山で安田が金主だと誤認させれば、市場関係者なら両者の結節点に北海道炭硯鉄道の買占めで勇名を馳せた雨宮の存在が浮かびあがるという仕掛けであろう⁵⁰⁾。しかも雨宮は22年北海道檜山の利別川沿岸で砂金採取を開始し、自身も「奥州辺の砂金のありそうな」「気仙沼、月山、湯殿山などを探検した」⁵¹⁾ほどの金山熱の持ち主でもあった。

2. 八溝金山株の乱高下

9月に定期取引に上場された八溝金山株は9月中の売買高は1,180株、50円払込の株価は50～52円、10月中の売買高は6,630株、株価は10月11日の終値56.05円が12日の終値では60.00円と大台に乗り、株式欄でも「八溝金山株には谷、横中、丸ト買に対する持株筋の小口売なりしが、昨日に於て俄然八円高を告げ、後場に買方が利食はんとして却て四円安を告げ、其内情の如何なるかは未だ知らざれど、何れは誰れかの徒らならんなどといひき」(M38.10.13東日)と注目を集め、10月中の高値は64.20円となった。

11月になると「該株の買進み益々甚しく、而かも当限と先限との直轄は五六円も開きて…極めて不穩」(M38.12.9.K)となり、「売方入丸よりの注意で取引所が証拠金を二十五円とまで引上げ…同株を…証拠金の代用にせぬ」(M38.11.26東日)とするなど、過熱する一方の八溝金山株への一連の対抗策をとった。八溝金山株が「売買不穩の形勢を示すや、取引所は直ちに証拠金を増徴し、終に極度まで(半額)課した」(M38.12.9K)のであった。

こうして八溝金山株は38年11月24日から26日にかけて株式市場で大波乱を引き起こした。八溝金山株の投機筋は、相互に関連が濃厚な京浜電気鉄道(京浜)

50) 松谷が八溝金山の社長に担いだ三浦泰輔という人物は、実権者の雨宮敬次郎が「藤田〈伝三郎〉の雇人で五十円か百円貰って居る」(雨宮敬次郎述『過去六十年事蹟』明治40年、p162)腰弁を賃取橋の番人よろしく「能く身代を守って行って呉れる」(前掲『過去六十年事蹟』p164)として甲武鉄道社長に推した経緯があり、岩田作兵衛も当時は「地位も何もない」(前掲『過去六十年事蹟』p164)駆出しであった。こうした三浦・岩田と雨宮の関係は雨宮と安田の資金関係と同様に広く世間に周知されていた。

51) 前掲『過去六十年事蹟』p148

52) 松谷のかかわった一連の買占事件の登場人物には京浜役員を兼ねる者が少なくない。↗

⁵²⁾株を「例の八金に代へて買廻り」(M38.11.25東日)、取引所は「京浜は証掘金の十二円とまで引上げられたる上に、保証金に代用すること適はぬ事」(M38.11.25東日)と規制を強めた。このため京浜の株価は「八金と共に三四円方引下げ」(M38.11.25東日)られた。

松谷は自分の腹心を巧みに操って八溝金山株を「自分の名を出さず、架空の人間の名を使って注文を出」⁵³⁾すことを常套手段とした。松谷の腹は「一方の店から売り、一方の店から買っておれば、売っておいた方へ株券を渡し、現金を受取っても、他方から正株を引取らなきゃ、損をするのは仲買店であり、その店が違約処分を受けても、こっちの知ったことじゃない」(盛衰,p268)というものであった。

3. 八溝金山事件の結末

「自分の店に注文しているお客の身許を洗って見ると、どうやらそれが蠣殻町に事務所兼住宅を構えている天一坊と強い繋がりを持っていることがハッキリ」(盛衰p270)したため株価は急落した。11月25日の相場では「例の金山が之れと同一視せられたる京浜と共に前日三五円安を演じたる気先、昨日の金山株には五十六円より俄然三十五円と放れ、二十一円と付けられて此に三十五円方の大劇落を演じたるが如き、左なくも之れを担保とし居る取引所の損害もがなと唱へられ」(M38.11.26東日)、東株の大幅安をも招き「後場は右金山株暴落の結果として立会を延引」(M38.11.26東日)させた。すなわち「当切に至り八百

／＼片野重久[東京米穀取引所理事長、39年12月京浜電気鉄道(京浜と略)常務就任(沿革p166)]、青木正太郎[東京米穀商品取引所初代理事長、40年10月京浜取締役、43年8月社長就任(沿革p168)]、相模(旧相王)鉄道発起人・相談役(鉄道雑誌8号,p26)、横浜倉庫、群馬電力、東京電力等に関係)、雨宮敬次郎[東京商品取引所の理事長、37年10月京浜専務、37年12月社長就任(沿革p167)]、守屋此助[八溝金山取締役、33年3月京浜取締役就任(沿革p166)]、岩田作兵衛[八溝金山取締役、33年3月京浜専務就任(沿革p166)]、馬場道久[日本倉庫社長、37年10月京浜監査役就任(沿革p167)]、岩田新之助[釧路炭礫専務、37年10月京浜取締役就任(沿革p167)]、窪田弥兵衛[釧路炭礫監査役、37年12月京浜監査役就任(沿革p167)]などである。このことから、当時松谷と行動を共にした岩田作兵衛など雨宮系資本家は当時京浜にも関与を強めつつあったことは間違いない。したがって市場では八溝と京浜両銘柄は株価面でも相互に関連性が強いと見做されていたようである。

53) 由利亀一談『相場今昔物語』日本経済新聞社、昭和27年、p24

株を受けた上に、来月以後の中先にて尚ほ三千株を受けねばならぬ」(M38.11.26東日)買方は「取引所が…証拠金の代用にせぬと云ふことになったので買方の融通が付かなくなった」(M38.11.26東日)結果の追敷金未納問題の発生であり、「買方なる一丸の四万円を頭に、宮が一万円、横中が一万円と云ふにありて、横中と宮だけは納れたるも、一丸には午後五時の期限過ぐるも未納、去れば後場は六時に至るも立会ふに至らず結局休会」(M38.11.26東日)となった。

東株『五十年史』は「八溝金山会社株式暴落の為追証拠金を徴収したるに、買方仲買人中、不納の者ありたるを以て、遂に之を違約処分に付す⁵⁴⁾」と記している。「中島さんの方は資力がありましたので、その株を引取」(盛衰p270)った中島豊次郎は36年8月18日東株仲買人を開業(年表p49)した八溝金山株買方の機関店の一つであった。一丸印の八溝金山買付は当200枚、中610枚、先950枚、計1,760枚、京浜買付は1万株(M38.11.28東日)で売買証拠金、身元保証金などを八溝金山株で代用していたため、取引所は「兎に角四、五万円の損害は免れざるべし」(M38.11.28東日)と予想され、最終的には東株は6.2万余円を賠償した。(年表p53)

翌々日の27日の八溝金山株は「処分的売買とも云ふべきものが、後場に行はれたるが、立五に千枚の買物が入り、角十にも千枚程利食ありし為め、三期共十円也の一直を以て売買を操つられたり」(M38.11.28東日)と、25日終値21.0円の11.0円安の10.0円にまで惨落した。かくして八溝金山株は39年3月売買停止となった。

『東京日日新聞』は関係者を取材して「聞くがままを記」(M38.11.26東日)したが、「其仲買及売買双方に注意を払ふべき責任ある」(M38.11.28東日)はもちろんとし、⁵⁴⁾「其売買物件を確実に選定すべき」(M38.11.28東日)責任を有する取引所が「第一金山のやうな株を始めから、場に掛けるのが失態」(M38.11.26東日)であり、「昨日の三十五円といふ直を付けたが已に不穩であるのに、更に二十一円とまでの付直の不穩なるをも看過した」(M38.11.26東日)

54) 東京株式取引所『五十年史』昭和3年、p139

「取引所の失態」(M38.11.26東日)を強く批判,「金山位の株の為に模範市場の機関を停滞せしめたなどは何んの為めの理事か」(M38.11.26東日)と「金山寺の味噌を付けた」(M38.11.26東日)理事を追及した。違約処分の損害高は約7万円の見込で,取引所側では「損害金支出は同所定款第五十一条第二項により賠償責任準備金中より支出する由にて配当金には何等の影響なかるべし」

(M38.12.2読売)と損害軽微を強調した。しかし東株の株主中にも「違約仲買を規定の二十四時間後に葬むり,其損害を準備金より支弁するが理事者と云ふにあらず」(M38.11.28東日)と理事の責任を問う声も上がった。その背後には「松谷などの本尊には已に抜け居るといふもあれど,如何あらん取引所の重役中の者にも其買持ちだけを売方に引受けらると同時に売方に買収された」(M38.11.26東日)との噂も関係者の間で根強く,「今回の失態と腐敗の如きは外人をして鼻を掩はしむる」(M38.11.26東日)定期取引の信用失墜との厳しい声も出た。

「三十八年十一月中,仲買人北村熊吉氏は八溝金山会社株式書約定に対する追証拠金不納に付き定款第十七条に依り同日以降,其の売買を停止して,之を違約処分に付し,右処分終了の後,翌三十九年四月五日,農商務大臣の認可を得て之を除名⁵⁵⁾」となったため,松谷に嵌められた買方仲買人一丸印の北村熊吉は切腹自殺したと伝えられる。「八溝金山の問題で失敗⁵⁶⁾」した北村熊吉の義兄・有馬与四郎⁵⁷⁾の米穀仲買店を千原伊之吉が引受けた。

その後の八溝金山では借入金,未払金等の負債が増加し,経営状態は悪化した⁵⁸⁾。松谷自身は「岩田作兵衛氏等と共同して茨城の八溝金山と云ふのを發起し,山元の成績面白からずして岩田氏等既に手をひるたにも拘らず,私一人にて今尚ほ細々ながら経営を続けて居る⁵⁹⁾」と述懐している。41年時点(諸, M41下p91)

55) 東京株式取引所『五十年史』昭和3年, p309

56) 千原伊之吉『成金物語』大正5年, 采女社, p255

57) 有馬与四郎(蠣殻町1の2)は米穀仲買店, 40年度の所得税3.85円, 営業税23.50円(日韓, p193)

58) 前掲『大子町史』, p206

59) 朝比奈知泉『財界名士失敗談 上巻』明治42年, 毎夕新聞社, p296

では宇野直治郎、宮腰信次郎⁶⁰⁾、藤田包明⁶¹⁾らが八溝金山役員に加わった。大正2年八溝金山の鉱業権も常陸鉱山会社に譲渡され、さらに飯村七郎、龍屋豊へと転々とし、短期間の採掘と中断を繰り返すこととなる。⁶²⁾

V. 松谷元三郎の関与事業（江戸見崎養魚、日本倉庫）

鉱業関係ではないが、ほぼ同時期に松谷らが関与した事業として江戸見崎養魚、日本倉庫両社を概観しておきたい。まず40年1月合名会社羽田組（日本橋区蠣殻町1-3松谷合資と同住所）が「土地買入経営及賃貸」（日韓, p82）を目的に資本金1万円で設立され、武田忠臣が代表社員となった。武田忠臣は鉱山業、東商会員で、勢和鉄道社長、米穀取引所の大株主、八溝金山の株主であった。武田と松谷は相互に不正行為にも加担し合う緊密な仲間であったと想像される。IIの富倉で言及した鈴久が全国各地の土地買占めの一環として羽田、洲崎に各20万坪を購入した。40年ころ没落した鈴久が売却に転じたが、埋立を予定しただけの境界もはっきりしない一面泥海の海面下土地である「羽田二〇万坪を買うものはいなかった」⁶³⁾とされた。時期的に見て鈴久からの継承と推測される武田所有の羽田埋立地は41年4月ころ「今回米穀仲買人にて今天一坊…に譲り渡され」（M41.4.18読売）、松谷は江戸見崎養魚会社を経営すべく、穴守稻荷付近の埋立地に700戸もの官吏向貸長屋のほか、「浅草の六区に擬したる大遊覧場を設ける」（M41.4.18読売）大構想をぶちあげた。松谷自身の談話によれば、「羽田穴守の後方約四十五万坪の持主として、現に私は之が埋立にかかり、十万坪斗り既に出来あがった所がある。且つ之と同時に江戸見崎養魚株式会社を設立する手筈にて、昨今着々進行中ゆへ多分九月頃には開業し得らるる運びである。

60) 宮腰信次郎（千駄ヶ谷村903）は釧路炭砒取締役（要録M40, 役p533）、小倉鉄道取締役（要録M44, 役p496）

61) 藤田包明は釧路炭砒、朝日銀行各取締役（要録M44, 役p384）、大正11年では山口県阿武郡徳佐村に居住（要録T11, 役下p6）し松谷一家経営の北日本興業取締役（要録T11, p222）。江戸見崎養魚監査役藤田包助（諸M40, 上p173）も同一人か。

62) 前掲『大子町史』, p206。常陸鉱業は38年6月設立、取締役長井益太郎ほか（要録T9, p280）。龍居豊は日米自動車取締役（要録T9 役中, p58）

63) 小島直記『日本策士伝』中央公論社、1989年、p378

此の仕事は大丈夫失敗の氣遣ひなしと思ふ⁶⁴⁾と述べた。

江戸見崎養魚(株)は41年8月荏原郡羽田町に資本金50万円で設立され、取締役は富士屋ホテル監査役(要録M40, 役p354)の山口幸太郎、浅草の川魚料理店主の大谷儀兵衛、松谷の配下の今川繁治郎、監査役は松谷との接点の多い藤田包助、辻安次郎(川崎町)など、松谷関係者や大遊覧場への出店業者等で占められた。(諸M40, 上p173)その後、松谷自身や義父の後藤義三郎、山根正次、田中亀之助、内野五郎三なども役員に登場する。(諸M43, 上p146)

42年東京米穀商品取引所監査役の松村辰次郎(松辰)が大口の米買占めを行なった際に、丸イ印、イ印など「松辰の機関仲買店」(M42.9.7萬)から追敷の代用として「三文の値打もない」「江戸見崎株がどしどし取引所へ舞ひ込んだ⁶⁵⁾」という。松辰と江戸見崎養魚の大株主たる松谷との同盟関係を示すものと思われる。根津嘉一郎の執事の鎮目泰甫はこんな「ボロ株」(M43.1.15B)の受領を黙認していた「取引所の執行部もこれに味方しているのではないか⁶⁶⁾」と追及した。43年10月農商務省は松辰らと結託したとして東京米穀商品取引所の青木正太郎理事長以下の執行部を解任(M42.10.3 東日)、根津が新理事長に選任された。

一方、同じ頃松谷が株式を乗取って自ら社長に就任した日本倉庫は「江戸⁷⁾なる土地六万坪を抵当として十二万円を武田忠臣氏に貸付けた」(M43.7.28読売)が、しかし松谷らを怪しいと見た検事局は「前記十二万円とは或は捏造の債権にして、之に依りて同社債権四十七万円の辻褄を合すべき細工」(M43.7.28読売)かと疑った。しかし松谷が拘禁され、松谷派の日本倉庫「重役の連袂辞職となり」(M43.9.3保銀)買占めは失敗に終わった。日本倉庫では44年9月「一時社内に非常の悲境を來たせるを以て内部の整理に着手⁶⁷⁾」し、役員総退陣と減資を行なった。日本倉庫の整理案として「前社長松谷元三郎氏の羽田土地買入事件に関しては同氏の持株七千二百株を<日本倉庫>会社に提供して相談役の千坂高雅氏

64) 朝比奈知泉『財界名士失敗談 上巻』明治42年、毎夕新聞社、p296

65) 報知新聞経済部編『相場実話』千倉書房、昭和7年、p107

66) 石田朗『東京の米穀取引所 戦前の理事長』東京穀物商品取引所、1992年、p253

67) 『大日本銀行会社沿革史』p75

の名義となし、一方右<羽田>地所に抵当権を設定し、武田忠臣氏主債務者として其代金十二万円に年四分の利を付し向ふ三ヶ年間据置き十ヶ年賦を以て弁済」(M44.3.28読売) させることで解決した。江戸見崎養魚株式は定期取引銘柄になったわけではないが、同盟者の米取引の証拠金・代用証券等として仲買人や取引所に納入され、関係先に多大の被害を与えた点では八溝金山と同じ構図といえよう。

むすびにかえて

松谷元三郎は日本倉庫ともども買占め中の「仁寿生命⁶⁸⁾の出資権譲受(東条, 長郷, 西村の三名分) 契約を破棄し、同時に日本倉庫会社の株式名義を他に譲り渡し、尚従来の金銭取引関係を一掃」(M44.5.26東日) し、戦線を縮小した。45年時点の『地籍台帳』の名寄索引では松谷一族、後藤義三郎、松谷合資、日本倉庫、江戸見崎養魚、八溝金山名義の宅地は記載されていない。日本倉庫事件の影響としては日糖事件をはじめ、大日本水産、東洋汽船、宝田石油、東京米商取引所、日本製布、大日本醤油製造などとともに「有為なる事業の発達を阻止し、真摯な投資界を荼毒したること甚だ多し⁶⁹⁾」と評された。松谷は大正3年6月時点の信用調査では蠣殻町1の3、松谷合資会社内、所得税…円、職業欄は「雑業」、正味身代は「負債<超過>」、収入「未詳」、信用の程度はDa「少」と、普通以下のランクに下落している。(商工T3, p354) 大正5年時点では松谷の松谷合資以外の兼務先は見当たらず、松谷自身も「屢次の失敗により、明

68) 仁寿生命専務の東条一郎は「自分は一方米穀取引所理事たり、兼ねるに日本倉庫社長となり」(M43.8.6保銀)、日本倉庫の支配人は「仁寿生命より倉荷証券を担保として十六万円を引出し」(M42.11.9読売)、「期米買占めに投じて失敗」(M42.11.15B)した。松谷は「生命保険会社の買収に甘き汁を吸はん」(M43.8.6保銀)として「東条<一郎>氏の<仁寿生命>出資五千円位を七万円といふ高値で買ふ」(M43.8.6保銀)という乗取りに出た。どうやら東京米穀取引所、仁寿生命、日本倉庫、江戸見崎養魚の4社は相互に複雑な取引関係で結合している上に、松谷、武田、松辰、東条一郎、青木正太郎などの役員兼務も重複が多くて入り組んでおり、松谷が青木追落しに一役買うなど全貌の解明は容易ではなく、一連の事件の根深さが感じられる。

69) 『地籍台帳』明治45年, p120

70) 野村元五郎『株界三十年史』野村徳七商店調査部、大正6年, p90～1

治四十年以後はそのなすところ、漸く反省を加へて、また往年の猪突的意気を露出するには至らなかつた⁷¹⁾」とされる。松谷自身は「ソんなに失敗しても尚ほ相場は廃められない…乾坤一擲の快挙であるから、勝ても負けても愉快で堪らない。惟ふに負けても勝ても何時も十万円以下で済んだ例しがない⁷²⁾」と自己分析した。

the big store という米国の詐欺用語がある。カモとなる客から金を騙し取るため本物そっくりに模造された模擬施設のことである。松谷は「少しも悪辣の手段を講ずるに躊躇せず…善からぬ策に出」(M43.8.6保銀)る「自から定評もある」「兎角世に不評を招ける」(M43.8.6保銀)人物と報じられることが多い。高倉藤平でさえも「三十四年松谷天一坊に一杯食されて豊川鉄道株を買占め、その結果僅か三万円の金にも手詰りして、十月には終に仲買を廃業せざるを得な程の酷い目に逢つた⁷⁴⁾」と「一生一代の失敗」を述懐している。南波礼吉は「金持ちから資本を引き出すことにかけては蓋し天下一品⁷⁵⁾」と評している。

Iの半田、IIの富倉の場合は仲買人としての格や資産は松谷より数等上で、関与した鉱山も八溝より大規模であった。しかし半田、富倉は一族の家業として合資会社形態での鉱業投資にとどまり、本業たる株式仲買商との相乗効果は見られない。これに対して格下の松谷は株式仲買商、米穀仲買商などの人脈を駆使して、定期取引銘柄としての上場、代用証券としての部分的流通性の付与など、鉱業株式投資と証券業との新結合を行ったところに彼の革新性がある。半田、富倉は相場で獲得した富の大半を鉱山で喪失したものと思われるが、帝商等の取引金融機関以外には彼の個人財産の減衰の悪影響は及ばなかった。し

71) 前掲『財界物故傑物伝』下巻, p418。松谷は大正9年時点で東京証券交換所の常務に就任した直後の大正10年8月7日46歳で急死した。証券交換所は拙稿「大正バブル期における起業活動とリスク管理—高倉藤平・為三経営の日本積善銀行破綻の背景—」『滋賀大学経済学部研究年報』第10巻, 平成15年12月参照。

72) 前掲『財界名士失敗談』p295

73) 米国の独創的な詐欺師のバック・ポートライトが1900年に開発した技法で、証券会社や賭博場の細部にまでそっくりに仕上げた本格的なものでは、施設内での雰囲気、あまりの迫真性の故に客は詐欺にあった事実気付かない例まであるという。(カール・シファキス、鶴田文訳『詐欺とペテンの大本科』青土社、1996年, p389～391)

74) 前掲『財界名士失敗談』p306

75) 南波礼吉『株界生活六十年』昭和28年, p118

かし松谷の場合は革新性の反面、第三者への多大な迷惑を及ぼした点是否定出来まい。江戸見崎養魚株式を証拠金代用証券として受け取っていた米穀仲買人の萩原長吉は「三文の値打もないもの…私共はいまだにその株券を持てゐます」⁷⁶⁾と証言している。朝比奈知泉から「投機界の手品師」⁷⁷⁾、永井末之輔から「策略に満ちた相場師」⁷⁸⁾と評された松谷が1905年（明治38年）に仕組んだ八溝金山事件もある意味では一種のthe big store と見ることも可能であろう。野城久吉は明治43年著書『商機』の中で事件を次のように総括している。「当初から、金鉱を採掘して儲けようとしたのではなく、株式会社として多数の人に利害の關係を持たせ、而かも自己所有の株式は、砒区の売代金を以て払込んだことにして、会社がドウなっても、自己の懷は痛まぬ工夫して立てた仕事だ…客が買ってきたら、復古紙同様の実株を浴びせかけてやらう。又直惚れで売込んで来たなら…品攻をして対手を苦しめ踏金を取らう。万一、暴落乃至暴騰があれば…巧みに利抜きして、最後の迷惑を仲買にかけて、違約処分とし、其上の損害は取引所へ負担させやうと云ふ目論み」⁷⁹⁾

松谷の目論んだ明治38年には日露戦費調達上対外信用の向上が至上命題とされ、政府が鉱業抵当法制定、日本興業銀行法改正など一連の産金奨励策を推進中であった。鉱山調査部を新設し、専門家を囑託技師に迎えた興銀でさえ鉱山師に一杯食わされ、「見込立たず、金の採掘を中止」⁸⁰⁾した波佐見金山に376万円もの不良債権を発生させるリスク管理上の失策を余儀なくされた時期であった。金融史上著名な波佐見金山事件と並んで、同時期の八溝金山事件にもある種の天才的な商人の「虚業家」的活動の特異性を検出することが可能であろう。（本稿は平成17年度科学研究費補助金『近世・近代商家活動に関する総合的研究』（基盤研究B（2）15320083，研究代表者宇佐美英機氏）による成果の一部である。）

76) 報知新聞經濟部編『相場実話』千倉書房，昭和7年，p108

77) 前掲『財界名士失敗談』，p289

78) 永井末之輔「いばらの途を歩んだ理事長の群像」石田前掲書，p90所収

79) 野城久吉『商機』民友社出版部，明治43年，p422～3

80) 『日本興業銀行五十年史』昭和32年，p119